

## マララの勇氣

交野市立第四中学校 二年 岡田 彩音

女の子を学校に通わせるなんて無駄だと、大勢の人が信じている国、パキスタン。マララは、そのパキスタンに生まれ育ちました。兄弟げんかもするし、本を読むことや、勉強をすることが大好きな、ごく普通の女の子だというのが、最初の印象でした。

パキスタンでは、女の子だからという理由だけで職業が限定されたり、男の人の付き添いが必要なければ買い物など家から出ることさえ許されないので。また、マララの村の子の多くが学校に行っていないかったり、マララのお母さんも字を読めませんでした。

そんな中、マララのお父さんは学校を経営し、マララに「自由に向かつて進みなさい。」と、勉強することや、やりたいことなどを応援し、愛情いっぱい育ててくれていました。

パキスタンで地震が起こった時、人々が傷ついていた心に、タリバンと繋がりのあるファズルツラーという人が圧力をかけてきました。最近、テレビでタリバンがアフガニスタンの州都を制圧したというニュースをよく耳にします。タ

リバンのお母さんもそんな二人を応援しました。

しかしこの後最悪な事態が起こってしまいました。スクールバスに乗っていたマララがタリバンの男に銃で撃たれたのです。何とかイギリスの病院で二命をとりとめました。マララの顔の左側は動かさず、耳から出血が止まりませんでした。銃弾はマララの脳の近くをかすめ、マララの体の中に残っていました。一度は死のふちをさまよいましたが、世界中からの励ましでマララは少しずつ元氣になつていきました。正しいことを正しいと主張できない状況に私は疑問を抱きました。

私はこの本を読んで、女の子は教育を受けなくていいと主張している国があることや、勇気を出して権利があると訴えている人がいること、そして間違ったことをしていいのに罰を与えられることを知りました。私自身もマララのような勇気ある行動はできないかもしれないけれど、おかしいことをおかしいと言える世の中を作るた

リバンの勢力は拡大していく一方のようです。

そして、マララの身の回りでは、タリバンが爆弾で学校を破壊することがよくありました。タリバンは、女子が学校で教育を受けることはイスラム教に反していて、パキスタンの人達も、大人になったら女性に家事をするだけだから、学校に行かなくていいと思っていました。また、マララの身に危険が迫った時に、教科書を持って避難しようとする、置いて行きなさいと言われました。タリバンのせいで、自分が頑張ってきたことを取り上げられる、私はそんな辛い話はないと思えました。今まで私は、当たり前のように学校に行つて勉強してきましたが、勉強したくてもできない子がたくさんいるのだと知つて、悲しくなりました。どんな人であれ、女の子であれ、みんな平等に教育を受ける権利があると私は思います。そして、もし自分が逃げなければならぬ状況になった時に、多分教科書など持つていかないだらうと思います。それだけマララは、勉強が好きだったのだと思います。また、なぜ女性が将来、家事をするか決めつけるのでしょうか。別に男性が家事をしていいし、女性も自由に働く権利があると思います。私は、「女子は、教育を受けずに家にいれば

めに何か出来るのではないかと考えました。例えば、パキスタンやアフガニスタンで起こっている出来事を自分のことのように身近に感じて考えることや、知ってもらうこと。そして、私たちと同じように普通に教育が受けられたり、すべての人々が人間としての基本的な人権を尊重される世の中になるように、今の私の将来の夢である外交官になつてこのような問題に取り組んでいきたいです。

「マララ」

著

マララ・ユスフザイ

パトリシア・マコーミック

訳 道傳 愛子

岩崎書店